

げんてん ふれあい 福井

2012 SPRING 第42号



第13回 げんてんふるさと文化賞
および芸術新人賞受賞者インタビュー

若狭の歴史と人物「杉田玄白、雲浜と幾松(四)」

ふるさと福井「食育の祖 石塚 左玄(八)」



千葉半左左さん
<敦賀市>

活字では得られない
手書き文字の美しさ

「地域文化」

の向上に尽
力されている

財団からの受
賞は大変光



個展「屏風の世界・古代文字による」(県立美術館)

活字では得られない
手書き文字の美しさ



舟澤茂樹さん
<福井市>

歴史は現在・未来を知るカギ
文化の源泉は歴史の中に

「前例の
ない歴史分
野での受賞
に責任を負
感」「文化の
子どもも大切に
したい」

源泉は歴史の中にある。今後も福井浦

に「文化の
感」「文化の
子どもも大切に
したい」

芸術新人賞	ふるさと文化賞
千葉さん(書道)・舟澤さん(郷土歴史・文化)・木下さん(篆道)	今村さん(剣詩舞道)・松谷さん(洋楽=ヴァイオリン)
 研究成果を多くの著編書として発表	

当財団では毎年2月7日(福井県ふるさとの日)に、ふるさと文化賞(地域文化の普及・発展に貢献したひと)および芸術新人賞(将来有望な新人芸術家の表彰を行つてあり、日本原範敦賀地区本部において、高辻哲理事長から受賞者一人ひとりに賞状、賞金、胸彰楯が贈られました。

「墨と紙、筆」とまず謝辞を述べられ、「墨と紙、筆で多彩な表現が出来る書道に興味があり、また文字を美しく書きたいとの思いがこの道に入つたきっかけ」だと。

達に、日本の伝統文化のひとつである書道の魅力を伝えたい」更に自己研鑽に努め、今後とも書道展の開催等により書道を通しての文字文化の向上発展に、また地域の文化活動の向上の為に微力を尽くしたい」と抱負を話して下さいました。



研究成果を多くの著編書として発表

第13回 (平成23年度)

げんでん



財団シンボルマーク

財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的にしています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にした広報誌を自指します。

CONTENTS — 42

- 第13回「げんでんふるさと文化賞および芸術新人賞受賞者インタビュー」 2
- 若狭の歴史と人物 「杉田玄白、雲浜と幾松(四)」 4
- ふるさと福井・人物シリーズ 「食育の祖 石塚左玄(八)」 6
- 第14回 ふるさと大賞 写真コンテスト 8
- ふくいの伝統行事シリーズ 「オイケモノ」 10
- 敦賀市立博物館誌上ギャラリー／36 11
- 福井の文学碑 「天性の俳人 伊藤柏翠(その2)」 12
- 福井の民俗文化 シリーズ7 「高浜町日引の八朔綱引き」 13
- 情報ファイル 14

FRONT COVER

国選択無形民俗文化財 「オイケモノ」 (小浜市)



昨年の木箱を根元から掘り出す
う二月七日(旧一月十六日)、小浜市
加茂の加茂神社で古式ゆかしい年占の
伝統行事が厳かに行われ「区長より「今
年も豊年満作間違いなし」と報告され
ました。

(詳細は本誌10ページ参照)

小浜市

「オイケモノ」の「イケル」とは方言で「埋める」ということ。昨年神木の根元に埋めた七種類の種もの木箱を開披し、その発芽状態で新年の農作物の出来具合を占うという、全国的にも珍しい予祝儀礼(年頭の生業の豊作を占う神事)とされています。小雪舞を占う神事とされています。小雪舞

杉田玄白、雲浜と幾松(四)

幕末期の若狭で華を咲かせた玄白や幾松――

文: 杉本泰俊

筆者プロフィール



杉本 泰俊 氏
Taisyun Sugimoto

1949年(昭和24年)10月、福井県生まれ。高野山大学仏教学部卒業。小浜市に奉職。世界遺産推進室長、小浜市立図書館長などを歴任。2010年3月に退任した。これまで小浜市史の編纂に携わったほか、福井県史の調査執筆員を勤める。著書には「若狭の古寺美術」のほか、小浜市、ならびに小浜市議会が発行した「御食国」「小浜市議会史」の編集・編纂に当たった。1990年より高浜町中山寺住職、2010年5月より京都仁和寺総務部長。

「杉田玄白」

杉田玄白は、享保18年(1733年)江戸の小浜藩下屋敷で藩医杉田甫仙の子として生まれました。8歳から15歳までの7年間を父と共に小浜藩邸で過ごしたあと、元文6年(1741年)兄が早世し、自らも病弱であつたことから、父が玄白とともに小浜に帰国し、宮川の大沢寺の不動明王像の前の滝水を玄白に飲ませて養生させたと伝えられています。

その石造の不動明王像は、高さ60cmで、台石に「杉田氏」の銘が刻まれています。病弱であった玄白の平穎を祈願して父の甫仙が建立したもので、宝暦2年(1752年)に父の跡を継いで小浜藩医となつた年に建立されたものであります。

江戸に戻つた玄白は、幕府の医官である西玄哲に学び、外科を修めました。外科医となつた玄白は、ハイシコテルの外科書を見て西洋の外科のすばらしさを知り、西洋のものを学びたいと思い、「ターヘル・アナトミア」と出会い、小塚原で人体解剖を見た。この「ターヘル・アナトミア」に描かれている解剖図の正確さに驚き感動しました。そこでこの書の翻訳を思い立ち、幕府長

崎通詞を通して、オランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』を手に入れました。そして、前野良沢とともに翻訳に取りかかり、玄白39歳の安永3年

(1774年)に世に知られた「解体新書」が発刊されました。

『解体新書』の翻訳に至る経過あるいは翻訳中の出来事などを「蘭学事始」で回想して書いています。僕が30~40年

前に始まつた西洋医学が、こんなに盛んに日本の中に行われるきっかけとなつた

「解体新書」ができて、本当に幸せだと83歳になつた玄白が自らその感想を述べています。また、玄

白が85歳の亡くなる年に言つた言葉で、「医事は自然に如かず」というのがあります。自らの人生を「百たらず八十路

に余る五とせのいつにけり」と倦怠の気持ちを詠んだあとに、自分の医道の理念と如かず」の最後の言葉を残しました。

この言葉は、大変有名な言葉で、病気の治療は自然に従つた治療あるいは療養の仕方以上ものはないということがあり、自然界の大きな流れの中で生きている我々は自然に生きることこそが最も重要なと言われたのであります。

その前年、84歳の時に書いた「耄耋獨語」(ぼうてつじくご)、老いぼれた年寄りの独り言という意味」という本のなかに、「年を取ると目が見えなくなるし歯は抜け出し入れ歯を作つて入れたらガタガタするし、それを付けてご飯を食べてもおいしくない」となどと、いろいろと老人の苦しみを書いています。

さらに78歳の時に書いた「鶴龜の夢」という文書のなかに、「過ぎし世もくる世もおなじ夢なればけふの今こそ樂しかりけれ」という歌を詠んでおります。

これは、今までのこともこれから先のことも同じ夢である。同じ夢なら今ここに生きている現実を大切にすべきであると言っています。今日を楽しめば楽しいのない明日になるとでも言つています。このように今日はそれを大事に楽しむ生きることが重要であると幾つも



大沢寺跡(資料提供 小浜市)

大浪亭



玄白肖像 「解体新書」の中の画像（資料提供 小浜市）

事件後の対応のまことに責任を取られ、謝罪されてしまいます。そのうち十三代藩主となつた忠氏も、領内に入つた水戸天狗党の浪士の鎮圧にあたり、慶應3年（1867年）の鳥羽伏見の戦いに負けますが、小浜藩は一貫して幕府の政策にそつた行動をとり、激動の時代のなかで小浜藩が果した役割も大きなものがありました。

小浜藩は、第十四代忠氏のときの明治元年（1868年）旧幕府軍と新政府軍との間で戊辰戦争がはじまる、幕府軍に加担したもののが敗走して、政府軍に下つたのでした。

その頃、当時京都で売れつ子芸者となつていた幾松と小五郎が三本木の茶屋で初めて顔を合わせました。幾松は天保14年（1843年）小浜藩土木崎市兵衛と三方郡袖子浦の医師の娘との間に生まれた人で、幼少時、計と名付けられていきました。父が京都に出たため、のちに家族も上洛し、父の死によつての歳から舞妓となり、14歳で幾松の芸名を名乗つたといわれています。幾松は、そこで尊皇攘夷を唱える志士達が集まり、日本の将来のあるべき姿を熱く語り合つ小五郎に心惹かれ、また小五郎は豊かな黒髪に大きな瞳で口許の可愛い幾松に一目ぼれしてしまいました。小五郎29歳、幾松19歳の春でありました。

日本における蘭学の発達のなかで金字塔を打ち立てた玄白は、蘭方医として名声を得て、また大槻玄沢など多くの後進の育成につとめ、文化14年（1817年）に江戸において亡くなりました。

翻弄されていきます。当時、人老井伊直弼が反対派の橋本左内や吉田松陰などを死刑にした安政の大獄の時、京都所司代であつた小浜藩十二代藩主酒井忠義は、真っ先に家臣であつた梅田雲浜を捕縛しました。

しかし、安政6年（1859年）に桜田門外の変で井伊直弼が水戸浪士に暗殺され、幕府が公武合体政策に転換すると、京都所司代であつた酒井忠義は、孝明天皇の妹の和宮を将軍徳川家時に降下させることに成功しました。これが尊攘派を刺激することとなり、文久2年（1862年）、公武合体に乗じて京都所司代酒井忠義の殺害を計画した薩摩藩士のは挙兵して寺田屋事件を起こします。しかし、忠義は、

小浜藩は、嘉永6年（1853年）のペリー来航を前に、領内に大砲を備えたり、幕府と朝廷との関係のなかで

それ以後、献身的に、いくたびかの新撰組の襲撃から桂の身を守り、自らも対馬から下関に下つて出石潜伏中の桂に情報を伝えるなど尽くし、山口で新居を構えました。

明治維新後、桂は木戸孝允と改名し、維新政府の実力者の一人として、版籍奉還を実現させ、廃藩置県を果たし、政府の要職につきます。一方、幾松は山口藩士岡部高太郎の養女となつて松子と改名し正式に木戸夫人となり、東京で生活をしました。しかし、桂小五郎を愛した幾松は、時の人として自分の手を離れて活躍する孝允の後ろ姿を見て何が寂しい思いをしていたのではと思うのであります。激動の中、多忙な日々を過ごす木戸は、明治10年（1877年）に京都で死去しました。すると幾松は、京都木屋町別邸に帰り、髪を下ろして翠香院と号し、京都木屋町を望む位置の靈山に、小五郎の亡骸を葬り、自らのその傍に墓碑を建て、「正二位木戸孝允妻松子墓」と刻み、明治19年（1886年）に亡くなりました。

幾松は、眞っ先に家臣であつた梅田雲浜を捕縛しました。



幾松肖像 京都先斗町料亭幾松蔵（資料提供 小浜市）

ふるさと福井人物シリーズ

食育の祖 石塚左吉(八)

左吉から学ぶ現代飽食への猛省

石塚左玄 115年の食育の言葉

石塚左玄が「食育の祖」とも言われる由縁は、今から115年前の明治29年に彼が上梓した「化学的食養長寿論」の中で初めて「食育」の言葉を使い、子供達にとつてあらゆる教育の中で最も大事な教育は「食育」であり、その「食育」は家庭で親が行うものであると書いたからです。

そして彼の食への熱き思いと願いが
110年を経て法律となつて漸くに実
る事になりました。

平成17年6月17日に教育基本法が公
布されました。以下はその前文の一節
です。

文明開化の真っただ中で、食生活が激変していくのを眺めて左玄は、「日本人には日本人に合った食生活がある。洋風化の食をすれば病気をもたらす。」と食の洋風化に警鐘を鳴らしたのです。つまり1~15年前に食育運動が始まったのです。

わが國の發展のために、子どもたちが健全な心と身体を培い、未来や国際社会に向かって羽ばたく」とがであるようになるとともに、すべての国民が心身の健康を確保し、生涯にわたって生き生きと暮らすことができるようになる」ことが大切である。

子どもたちが豊かな人間性をはぐく

「化學的食養長壽論」(明治29年)

シテ體育教育才育ノ事ニ食育
ニヤ頭クハ我邦古往時ノ食養
事的ノ食養法トニ意ヲ留メテ教會

即ち教育力

子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくために何よりも「食」が重要である。今、改めて、食育を、生きる上での基本であつて、知育、德育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することとする。

③肥満と生活習慣病の増加

②栄養バランスの偏った食事と
大腸癌

教育基本法が出来た背景には7つの

食の危機・命の危機

食が病をつくる
食源病

法律です。
将来を生きる子供達の命を守るために
食の危機は命の危機とも言えます。

(4)過度の瘦身志向
(5)食の安全（偽装）
(6)海外への依存（自給率の減）

①伝統ある食文化
（食生活がその人の生き方）

「食育」には多くの事が包含されていて、農学から学校教育・栄養学・医学果ては国際政治等あまりにも範囲が広くて掴みどころが無くなるうとしているのも事実です。そこはあまり深く考えずに、食べる事から命を大事にすることが食育と思えば良いでしょう。左玄は食育の切り口を健康・命から考きました。

事に繋がります。

文／岩佐勢市

筆者プロフィール



若佐 勢市氏
Seiichi Wasa

1949年福井市に生まれる。
鳥取大学卒業。JA経済連・JA厚生連に奉職。前JA福井県厚生連理事長。職務の関係から住民健康管理のうえで、特に子供の食育に注目。現代の子供達の食生活の乱れを憂う。自らもスローフードの研鑽ならびに、福井市生まれで食育の祖と言われる石塚左玄の研究を進め、業績の紹介とともに、食育の重要性の啓蒙と、食と運動による健康づくりを提案している。石塚左玄の業績に詳しい。

がらも食を疎かにしているのが現実です。

中国では薬食同源、日本では医食同源と言われるほど食が健康と命をつくりてくれるのに、今はその食が私達の病気の原因になっています。生活习惯病はまさしく食を主因とした病気であります。日本人の2/3は生活习惯病で死を迎えています。代表的な生活习惯病の一つに糖尿病があります。糖尿病は予備軍も入れると成人の5人に一人となつていて最近激増をしています。

左玄に学ぶ人・地域・地球の健康法



中国では薬食同源、日本では医食同源と言われるほど食が健康と命をつくりてくれるのに、今はその食が私達の病気の原因になっています。生活习惯病はまさしく食を主因とした病気であります。日本人の2/3は生活习惯病で死を迎えています。代表的な生活习惯病の一つに糖尿病があります。糖尿病は予備軍も入れると成人の5人に一人となつていて最近激増をしています。

今では40年ほど前の日本の食事が世界で最もヘルシーで栄養バランスに優れているとされています。

洋風化が悪いのではなく左玄の風土論にあるように、欧米には欧米に合った食、日本人には日本人に合った食が大切なのです。

なつたのはまさにこの間違った食の洋風化を実践したからです。そして食料自給率の低下と同時にお米の消費量は減少し、今日日本人一人当たりお米の消費量は最大時の40%で、一日3食で1.5kgです。1食ではたった55gです。魚と肉では今は肉食が多くなり、魚と肉を合わせた肉類はお米の消費量を上まわっています。左玄は人は穀物食動物と言いましたが、もう肉食動物になりますとしています。子供達はいち早く完全な肉食動物に近づきました。

左玄の最大の長所はそれ自身栄養バランスがよく、特に和食は野菜の摂取量が多く、又他の副食とも栄養バランスがとりやすくそれでいてカロリーも適切である事です。つまり福井型食事と言われるご飯を中心の食事です。農業・漁業は地域の天候・地形・土壤・環境によつて変わってきます。そして過去からその地域で採れる農産物・海産物がその地域に住んでる人たちの心と身体をつくり、健康と命をつくつてきました。だからその地域に住んでる人は、その地域で採れる物を食べるのが最も自然で人に優しく、栄養も豊富で人を健康にすると言つたのです。

左玄が言うように「私たちは穀物食された食が栄養的にも、人間の健康にもお米主体の日本型食生活よりも優れないと勘違いをしてしまつたのです。

で取れる新鮮な物（入郷従郷）を食べて私たちはより健康になり、そしてその事が地域の農業・漁業も発展し、地域経済も活性化し、健康・元気になる。

わざわざ遠くから輸入しなくなれば、温暖化という生活习惯病を患つている地球にもいい影響を与えます。自分の健康を考える事は地球の環境を思う事に繋がります。地球の環境を考える事は自分の健康を思う事にもなります。

左玄の弟子達が「身土不二」と説明したように人は自然と一体であり、環境問題と健康問題は繋がっています。

現代人が左玄から学ぶ食育は



食育とは、食を通じて如何に生きるかを学ぶことであり生きるために必要な事です。つまり命の大切さを知る事です。食習慣は幼児期に形成され

て大人になつても簡単に変わることはない事です。つまり命の大切さを知る事です。食育を命と健康を切り口にして考案しましたが、取り敢えずは難しく考えずに、先ずは家族全員揃つて楽しく食事をする事から始めたいのです。そして食について話し合いましょう。

子供達の胃袋を地産地消の福井型食事の栄養で満たすと同時に子供たちの心の空腹を暖かい食卓で迎えて上げるのです。それが食育であり、親が行う家庭での責務と思うのです。子供達は親の実践を待つています。

事が大事です。

現代に生きる多くの者は食を単に食べる欲望の対象と同時に食に関するあらゆる利便さを追及して來ました。

そして今や総ての人が何時でも何処でも飽くなき食欲を満たす事が可能になりました。ところが食での満足感を得ることは出来ましたが、眞の健康や家庭でのコミュニケーションなど逆に大切な事を忘れてきました。その結果家庭での家族揃つて食卓を囲む事が少なりました。そこで家庭崩壊へと繋がつてき、その事が更に食生活の乱れに拍車をかける様になりました。石塚左玄の説く食育、その実践の第一歩は各々個々の家庭での食と食生活を見直す事から始まるのです。食育の郷土の先人「石塚左玄」先生の言葉を思い出して食育を実行する事が出来ました。左玄は教育を命と健康を切り口にして考案しましたが、取り敢えずは難しく考えずに、先ずは家族全員揃つて楽しく食事をする事から始めたいのです。そして食について話し合いましょう。



晩年の石塚左玄

テーマ

ふるさとふくいの 活力・笑顔



「微笑み返し」

弓道の試合の緊張感が解けて、一息ついた瞬間の表情が上々く見えられ、良い写真に仕上がっています。清楚と若さ・光と風・素直さと知性・素晴らしい雰囲気を持つ被写体を選ばれて、「ふるさと大賞」にふさわしい作品になっています。

デジタルでなく銀塩写真であることの魅力となって、立体感や階調の表現力（暗部の捉え方）等、デジタルでは表現し得ない銀塩写真の特性を生かした点も特筆すべきところです。

（講評／写真家 八木隆司）

大
賞
ふ
る
さ
と



久野 和也さん
(福井市)

当財団では、「ふるさと福井の自然・歴史・文化」等の地域資源を題材にした写真コンテストを毎年行っています。
表彰式 2月7日（福井県ふるさとの日）
今年度応募総数 317点



ふ
る
さ
と
賞

佐々木 輝美さん（越前市）



西 熱馨さん（福井市）

一般の部 「親子でどろんこまつり」

どろんこまつりのイベントで、親子で遊んでいるところだそうです。引き締まった体で大きな浮輪を押すお父さん。すごい勢いなのでしょう。しぶきが水玉状になっていてスピード感が出ています。

「しっかりつかまれよ」と優しくねは笑むお父さんと、中で押し込みされそうになりながらも無邪気な笑顔を崩せる男の子。二人の信頼しあった関係性が伝わり、心が和みます。写真ならではの一瞬の動きを見事に切り取っています。

（講評／写真家 新潟市写真家会員 関山 勉司）

一般の部 「花はす出荷の日」

花はすの出荷作業を終え、ひと休みでしょうか。今年の出来ばえなどを話題に、会話を楽しんでいるのでしょうか。笑顔があふれ、共同作業の楽しさが伝わってきます。

一人ひとりの表情や動きを際立たせながら、人の重なりを巧みに配置したバランス感覚が見事です。

（講評／写真家 桥口内 雄次氏）

総評

審査委員長
写真家 八木 隆氏

今回のテーマ「ふるさとふくいの活力・笑顔」に多くの写真が応募されましたが、その中で、祭・人物に関する写真から大半を占めていました。このテーマは函館市賞を掲げる人にとっては難解なテーマだったようですね。

現在デジタルカメラの発達で、写真というものが随時よく美しく撮れ、フリーハンディ撮影に適する時代にならざるを得ません。しかし、あまりにも頻繁に「二次元」という写真の平面性の面白さ(元々、色調、画面構成等)が見失われてくるように思います。その反面デジタルは、シャッターチャンスに強く、撮るところから回すところまで、色調設定も簡単に操作できるなど、非常に良い面も持っています。

お互いに銀色・トジタルの良さを研究して、より良い写真を撮るために工夫をして、トジタル時代にふさわしい作品を仕上げて、「ふるさと大賞」の作品創りに励んでください。



原田 寿さん(敦賀市)

一般の部「五人組」

いつも通りの片隅にひっそり佇む彫刻も、子供達にかかれれば、あっという間に素敵な仲間。「五人組」というタイトルどうりですね。

子供達の楽しげな笑顔に、硬いブロンズもおもわずほほ笑んだよう。大胆でユーモアのある構成が魅力的な作品です。

(講評/写真家 水谷内 健次氏)



青山 きくゑさん(鯖江市)

一般の部「ひと休み」

今、切り倒したばかりの沢のそばに座り、ひと休みしているところを撮影した作品。なんといっても、おばあちゃんのこの笑顔がとても素敵で、大木を切り倒すまでの苦労が窺えます。

沢の「牛捨」と、おばあちゃんがこれまで色々苦労を乗り越えて生きてきた「ねんりん」とが重なって奥行きのある作品になりました。また光をうまく捉え、バックの草の緑のあざやかさや、おばあちゃんの左半身が口く浮き出ていることで、とても立体感のある作品です。

(講評/株フジカラ—北陸福井支社長 竹澤 俊夫氏)



多田 幸男さん(福井市)

一般の部「躍動～よさこいの夏～」

「ンイヤッ！」そんな掛け声とともに画面から飛び出します。夜になりニサコイ踊りじめあります。鳴子を握った手を胸々と上り、熱く舞い乱る女性を見事なシャッターブラッシュで捉えています。

彼等体に迫寄り、二ーアングルで夕闇を背景にしたアンプルは活気にあらわされています。ストロボを効果的に使い、顔や衣装の細かい動きに慣れているのも丁寧ギッシリ動作を強調しています。

(講評/福井県写真部会議長 鈴木章司氏)



宮崎 まどかさん(越前町)

学生の部「しあわせ記念日」

成人日の華やかな晴れ着を身に、喜びと優しさにあふれた笑顔の輪が広がっています。記念撮影の瞬からカメラを構え、緊張の緩む瞬間をドキュメント風にとらえました。

記念写真とスナップショットの中間のようなティストに作者のセンスが光ります。

モノクロを途断して濃いめに仕上げ、写真に雰囲気と品格を加えています。まぶししい舟の姿を振り返る、おじいちゃんのフレンドリーな笑顔も、曲面に躍動感を与えています。三姉の宝物となる一枚です。

(講評/福井県立美術館 吉田栄子氏・野田訓生氏)

その他入賞作品一覧 (敬称略)

佳作

入選

佳作	入選
「おひなさん」	1位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	2位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	3位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	4位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	5位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	6位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	7位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	8位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	9位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	10位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	11位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	12位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	13位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	14位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	15位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	16位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	17位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	18位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	19位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	20位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	21位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	22位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	23位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	24位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	25位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	26位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	27位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	28位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	29位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	30位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	31位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	32位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	33位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	34位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	35位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	36位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	37位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	38位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	39位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	40位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	41位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	42位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	43位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	44位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	45位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	46位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	47位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	48位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	49位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	50位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	51位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	52位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	53位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	54位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	55位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	56位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	57位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	58位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	59位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	60位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	61位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	62位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	63位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	64位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	65位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	66位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	67位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	68位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	69位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	70位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	71位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	72位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	73位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	74位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	75位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	76位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	77位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	78位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	79位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	80位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	81位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	82位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	83位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	84位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	85位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	86位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	87位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	88位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	89位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	90位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	91位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	92位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	93位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	94位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	95位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	96位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	97位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	98位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	99位 佐藤千尋(福井市)
「おひなさん」	100位 佐藤千尋(福井市)

優秀賞

ふくいの
伝統行事

国選択無形民俗文化財

「オイケモノ」

小浜市



木箱に収める七種類の種もの

漢字で表記すれば「御生物」、「生け花く」とあり、「日本辞書」には「クリ、ミカンナドライクル」と出ているように、中近世以前から使用されていた言葉で、今では方言化されて若狭地方でごく普通に用いられています。

平成19年に「オイケモノ神事」として国選択無形民俗文化財に選定される以前は、その前年に「加茂神社上宮の神事」の名称で福井県無形民俗文化財に指定、それまで山間の村ではそぼそと行われた民俗行事が一躍広く知られるようになりました。

神事の次第

オイケモノが行われる小浜市加茂は、旧富川村に属し、小浜市の飛地になる宮川谷の入り口ののどかな集落。小北川の右岸に氏神、加茂神社の下社、左岸の森の中に上社が鎮座しており、「福井県神社明細帳」によれば、(昭和16)に大和国葛上郡より事代主命の分霊を祭つた由緒のある古社とされています。事代主命とはすなわちエビスサンであり、御所市の本社の近くにある余良市桜井の大神神社の祭神大国主神(ダイコクサン)の御子神とされ、

ます。午前十時
に開始の太鼓が打ち鳴らされ、下社の舞殿に供物を並べ、

神事当番二名により大御幣が振られて清祓が行われた後、御手洗川を渡った口稻馬場で神事当番が三回初弓を引く。「歩射神事」で一年の災厄を払いします。一行が上の宮の手前の大蛇を祭る枕祠と呼ばれる椎の巨木にさしかかると雄たけびをあげますが、これは上の宮での神事の開始を告げる警鐘かもしません。

タブや椿、椎などの照葉樹が繁る小浜市指定の社叢にある上の宮は、ノガミサンとも呼ばれる山の神の祭場ともされ、簡素な自然石の瑞垣に囲まれたいわゆる社殿のない神籬の禁足地で、供物を並べて一同の参拝の後、宮綱代の氏子代表が秉まり神事の準備をします。まず、側面に小穴を開けた杉材の口、栗、椎、銀杏(ギンナン)、ドングリ(ミズナラ)、榧(カヤ)、干し柿の七種類の木の実を匂ひのように上下に牛の舌餅を置き蓋をします。なぜ七種類なのかは不明ながら、いずれも縄文時代以来の野生の食物で、現在野老やドングリはふだんは食べませんが、飢饉の時の重要な救荒食とされています。

また、牛の舌餅はその名のとおり牛の舌のような横円形をした神饌の一品で、ハナビラモチとも呼ばれ、種ものの肥やしとして上下に挟むように納入され



白稻馬場での弓打の神事

ながら花餅を撒き豊作を祈念します。再度奥稻馬場で弓を引き、その後ムクの巨木の根元に昨年埋めた木箱を掘り出すとともに、新しい木箱を埋めて上社の神事を終えます。

年占の神事

なんと言つてもオイケモノ神事のクライマックスは種もの新年占い。再度社務所に戻つて、床の間を背にしていよいよ昨年埋めた古い木箱を開くことがあります。おもむろに箱を開いて七種類の種ものの発芽状態を検分し、恭しく机上に並べて「今年も種の芽立ち良く、芽を出していないものも、胸いっぱいには生きんばかりに膨らんでおり、今年も豊作まちがいなし」などと報告し、無事オイケモノ神事を終了し直会の楽しい宴会となります。

去年神事を見守られた民俗学者の野本寛一氏が、「日本を代表する『始原の神事』として極めて重要な行事」と評価されたように、オイケモノは若狭路に春を呼ぶ古式ゆかしいフレーミングな祭りといえるでしょう。



ムクの巨木の根元から昨年の木箱を掘り出す



発芽状態を調べ報告する

敦賀市立博物館 誌上ギャラリー/36



春霞嵐峠図 一幅 梅戸在親筆

嵐峠は嵐山、すなわち、桂川（嵐山付近では大堰川といい、保津川とともに呼ばれています）が丹波山地から京都盆地に出るあたり一帯のことをさしています。川の上流からみて右岸に嵐山、左岸に小倉山・龜山が迫り、古来歌枕として知られ、今日では桜の名所としても有名です。しかし、もともとは平安時代の貴族・藤原公任が「朝まだきあらしの山のさむければ紅葉のにしきぬ人ぞなき」と詠んだように、その名は紅葉の名所として知られています。桜でも知られるようになるのは、鎌倉時代の中頃に吉野から桜が移植されて以降のことです。鎌倉時代末期に後宇多天皇が詠んだ「あらし山これもよしのやうつすらん桜にかかる満の白糸」という歌は、江戸時代に出版された『都名所図会』に掲載され、こうした由緒を伝えています。

本図には桜はもちろん見事に描かれていますが、緑鮮やかな松との対比が風情をより一層豊かにしています。それでは、この松にはどのような由来があるのでしょうか。実は、江戸時代に嵐山の領主だった天龍寺が、景観の保全を図るために松や桜を植えたといわれています。というのも、江戸時代には樹木がさかんに伐採されてしまい、景観を損ねるまでになっていたからだそうです。鮮やかに描かれた桜や松は、実は人為的に植えられた、というわけです。

川面に目を移してみましょう。桂川にうかぶ筏は、嵐山の風景を描く際の定型といつてもよいほど、しまって見られます。『都名所図会』にも、桂川に筏を浮かべる人びとの様子が描写されています。筏もまた、桜や紅葉と並び嵐山を象徴する風物詩だったのです。

本図を描いた梅戸在親は、写実的な画風で名を馳せた原在中の三男（四男とする説もあります）で、寛政七年（一七九五）に生まれました。幕末には、現在の京都御所の櫻や杉戸に揮毫しています。他にも、幕末に将軍家へ陪嫁した和宮の嫁入用の屏風や、徳川慶喜が上洛する際に作成された源氏屏風・画帳に携わったとされています。明治一六年（一八八三）に八九歳で亡くなりました。

（参考文献）
高木博志「近代京都と後の名所」（丸山宏
伊藤勉・高木博志編「近代京都研究」思文
閣出版、二〇〇八年）
（著者）土古重宣・鈴木赳 桜町（新訂都名所図
会）二（筑摩書房「すくほ字書文庫」、一
九九九年）
敦賀市立博物館「平成十三年特別展
『京都御所の展開』（二〇〇一年）」
（図録）京都御所の展開（二〇〇一年）

□絹本着色
□落款 右親画
□縦40cm×横70cm
□印章 「在親」白文長方印

福井の文学碑

天性の俳人 伊藤柏翠 (その2)

文:山岸世詩明

(伊藤柏翠俳句記念館館長、ホトトギス同人)

それまで元気だったが、平成11年2月脳梗塞と肺炎で入院。8月再入院、29日には千鶴夫人を呼んで辞世を詠む。

夕牡丹はどの夕日を賜りし 柏翠

花鳥諷詠と花鳥巡禮

虚子は『花鳥諷詠』論（俳句は伝統的な五七五調、季語を重んじ、平明で余韻ある、宮觀写生を旨とすべきと主張）をとなえ、虚子の弟子柏翠も、花鳥巡禮として共に国土調詠、花鳥風月を詠む（全国を巡礼して山川草木、鳥獣虫魚を詠む）と。又海外まで足を伸ばした。柏翠の代表句は左記の通り。

虚子は柏翠と愛子を弟子とし、丙子（彼らを三国へ見舞いに訪れた。）俳諧の巨匠と言われるが、元々小説家志望だった虚子は、その都度愛子をヒロインに小説を書く。

「虹物語」の五部作と言われる「虹」「愛居」「音楽はなほ続きをり」「小説はなほ続きをり」「寿福寺」である。県内の代表句碑は三国東尋坊の二碑。

日本海秋潮となる頃淋し

柏翠

野菊むら東尋坊に咲きむだれ
雪国の深き底や縫待月

虚子

三国より福井移住と最後

平成11年9月1日（一九九九、九、31日、「手がつめたい、胸が暖かい、秋の風」と言つ。書いて見せたら自分で合図した。最後の句となる。）

手は冷た此暖か秋の風 柏翠
この妻の、このみ思ふ夜の長き、柏翠白かつたよ」「もうおしまひ」と言い、千鶴夫人に詠む。

三国の月慈寺に眠る

秋 選らざるものを春笛の呼ぶ如し
冬 吹雪く夜の勝に蟹ある三国かな

春 散るさもて花の語ると覚えたり
夏 況しぶき涙の面を逆のぼる

愛子の死後も柏翠は愛子の母よしを天の母の如く大切にし、昭和24年一緒に料理旅館「虹屋」を開業、同年愛子との共著句集「虹」を発行した。

昭和52年よしが死去するまで妻子と共に一緒に暮らす。

昭和56年福井県文化賞受賞、昭和60年74歳で福井医科大学の学歌を作詞、作曲は古蘭裕而氏。平成元年に勲五等双光旭日章受章。同年78歳で三国から福井市に移住する。

高浜虚子と柏翠

伊藤柏翠俳句記念館

柏翠の臨終にも立会い、最も信頼された弟子山岸世詩明氏が私財を投じて建設した記念館が鯖江市にあり、柏翠の作品、遺品等の数々が展示されている（入館無料）。

四十年住めばふるきと雪山河

柏翠



福井の民俗文化

暮らしの
古典

日引の八朔綱引き

シリーズ 7

八朔綱引き

催されることから、八朔綱引きと呼ばれています。

西側には山を背負い、東側には海を抱き、急峻な傾斜地を利用した「日本棚田百選」にも選ばれた美しい水田が自慢の高浜町日引区は、フグをはじめシマアジやハマチなどの養殖も盛んでも料理民宿もあり、年中おいしい魚介類が味わえるところです。

東向きの地形から、町内で最も早く日の出と月の出を拝め、海面や棚田に張られた水面に映る日や月の長くのびる影を見ると、誰もが「一日引」という地名に納得させられるようです。

日引区で毎年9月1日に奉納される綱引きは、旧暦8月1日の月連れで開

午後2時頃、区民約20人が氏神の氣比神社前に集合します。

拝殿から道をはさんで境内を抜けると石段と鳥居があり、その脇に枝ぶりの良いタモの木があります。元は鳥居の左右に一本ずつ生えていましたが片方は枯れてしまつたので、なつた綱を掛けるために枯れている方の切り株のところに丸材の杭を組んで枝の代わりにします。

タモの木の枝と丸材の杭の周りにそれぞれ集めておいた稻わらを寄せ、区民は2組に別れて約20～30mの綱を2本同時に張り立てていきます。

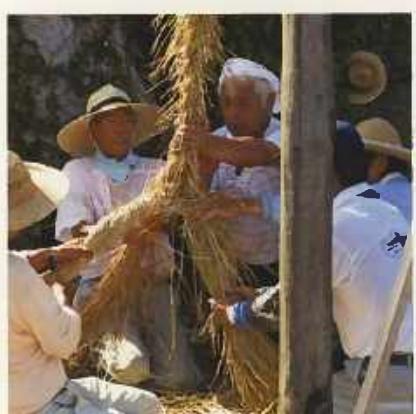
3本のワラの端をくくり、タモの枝と丸材の杭から下げたロープにつなぎます。ロープの端を引いて綱をつり下げるながら3本のワラを握った3人は「ヨーイ、ヨーイ」のかけ声で調子を合わせ、「ヨイヤサー、ヨイヤサー」で右回りにねじって引いては右どなりに手渡し手渡し綱にしていきます。綱わらを揃えて3人に渡す役3人と、口元で綱のよりを加減する1人などがペアになって2本の綱がなわれていきます。

神社に参詣を済ませたあと、左右に分かれた区民の前にいよいよ綱が引き出されます。一本目は拝殿に向かって右側を穂先にして「ヨイヤサー、ヨイヤサー」のかけ声で、綱が切れるまで引き合います。(適当なところで中央にいる人が石などを使って切断する)2本目は向かって左側を穂先にして同様に引き合います。

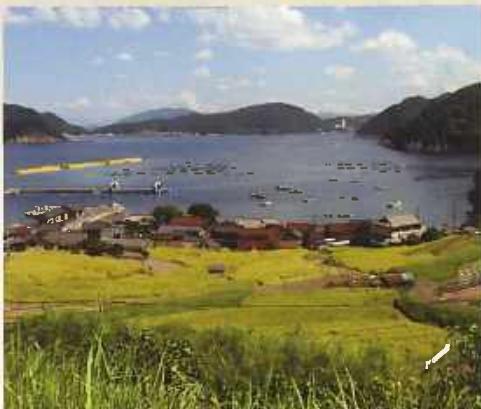
作・豊魚、子孫繁栄などを願うもので、綱を引く区民の顔は一様に笑顔で沿っています。

毎年欠かさず奉納されていますが、むかし大雨で綱引きを途中でやめたところ、夜になつて神さんが綱を引く声が聞こえて眠れないで、やっぱり綱が切れるまで引き合つたそうです。

福井県内では、敦賀西町の「夷子大黒の綱引き」と美浜町日向の「日向の水引」が有名ですが、どちらも



綱をなう



日引の棚田

ある程度ない上がつてくると、綱か

ら飛び出したワラを切り取り、2m間隔ぐらいで12束の青穂を綱にはさんでいきます。青穂かはさめたら最後に倍のワラを入れて4回分ほどなつて、倍の太さにして綱の穂先を作ります。

2本の穂先に形の違いはなく、雄綱、雌綱の別も特にないことです。

できあがつた綱は、すぐ前に広がる海水で10～20分ほど満ぬられて引き上げます。鳥居をくぐって拝殿の正面右に右は時計回りに、左は反時計回りにとぐろを巻くように据え置かれ、一日解散となります。

午後2時、背後にある大谷山の向こうに日が落ちて涼しくなつてくると、拝殿前に区のおとなも子どもも集まつてきます。

神社に参詣を済ませたあと、左右に分かれた区民の前にいよいよ綱が引き出されます。一本目は拝殿に向かって右側を穂先にして「ヨイヤサー、ヨイヤサー」のかけ声で、綱が切れるまで引き合います。(適当なところで中央にいる人が石などを使って切断する)2本目は向かって左側を穂先にして同様に引き合います。



綱を引く

予算総額（一般会計）4,481万円

1. 収入の部

- (1) 寄付金（日本原電株式会社）
2,870万円
- (2) その他の収入
365万円
- (3) 前期繰越金
1,246万円

2. 支出の部

- (1) 地域文化及び科学技術の振興、並びに青少年等の人材育成に関する事業
2,231万円
- (2) 「ふれあい」および「ゆとり」の創造に関する事業
720万円
- (3) その他の事業および管理費
1,530万円

6 重点施策

1. 文化団体等の活動を支援する助成事業の充実
2. ふくい県民総合文化祭および県内高等学校文化活動の支援
3. 地域に根ざしたふれあい活動の推進
4. 文化、芸術を愛する県民風土を高める顕彰事業の推進
5. 魅力ある文化イベント提供事業の推進
6. 信頼され親しまれる財団広報・広聴活動の展開

平成24年度 事業計画及び予算を決定

文化の育成支援など 6 重点施策を推進



事業計画および予算を審議する
第43回理事会

平成24年度事業計画及び予算が、3月22日に開催された理事会・評議員会において可決・承認されました。福島原子力発電所の事故を受け、非常に厳しい状況の中、新年度の予算は大幅に

削減されました。奇付行為第3条に定める「優れた芸術鑑賞機会の提供事業」を実施する県内の文化団体に対し、支援・助成を行っています。

1. 地域文化の振興を図り、やさしさと地域との調和に配慮した地域づくりを進め、もって、「ふれあい」とゆとりのある地域社会の実現に寄与する」

「げんぶるふれあい福井財団」では、○「地域文化の振興事業」○「ふれあい及びゆとりの創造事業」を実施する県内の文化団体に対して、支援・助成を行っています。毎年100を超える団体から応募があり、当財団の助成を受けて、県内各地でふれあいとゆとりのある地域社会の実現に向けた取組みが行われています。今回はこれらの事業の一部を紹介します。

当財団が助成した事業の紹介

勝山市わくわく合宿通学事業



市内の銭湯体験



魚のつかみ捕り体験



昔の遊び体験

● 実施主体
地域の公民館・小学校・住民等の代表者で組織する実行委員会が、勝山市と当財団の補助を受けて実施。
● 公民館に合宿して通学
村岡・鹿谷・北郷地区の合計56名の小学4年生が、それぞれ地元の公民館で3泊4日の合宿をしながら通学しました。

● 地域のボランティアが協力
高校生からお年寄りまで、多くのボランティアが参加しました。ボランティアと一緒に宿泊しながら、子供たちが学校にいる時間以外の活動を支援。食事担当・朝食・夕食の準備・調理

もうい湯・期間中、子どもたちに「もうい湯」を提供します。
● 集団生活・体験・交流
地域の伝統料理づくり、魚つかみ捕り・串刺し・調理体験、公共工事現場見学、地域の昔話を聞く会、もうい湯・銭湯体験、災害・環境学習会、工コバツクづくり、10年後の自分への手紙（成人式に配布）づくりなど、地域の中での集団宿泊体験をとおして文化や自然に親しみ、異世代と交流し、自己・自立の生活習慣を習得するなど有意義な体験をしました。

もうい湯・期間中、子どもたちに「もうい湯」を提供します。
なお、「親元を離れる」という辛酸から、参加児童の保護者はボランティアには参加していません。

後片付け。

当財団が助成した事業の紹介

触れて学ぶ里地里山体験活動事業

●実施主体

自然環境の保全・再生と生態系の維持を図り、子どもたちに将来にわたって環境を大切にする心を育む場と機会を提供する事業などをを行うことを目的に、事業の人たちが中心になって平成19年に設立された特定非営利活動（NPO）法人「里豊夢わかさぎ、地域住民やボランティアの協力を得て実施。

体験活動として、子ども会の行事としても参加できる。
原則として弁当・水筒等持参、現地集合、日帰り。

ども会の行事としても参加できる。

問合せ
☎ 0770-62-2525
E-mail wks-2525@amber.plala.or.jp

- 参加資格等
- 幼・小・中学生を対象に一般公募。親子や児童づれでの参加も可。また、学校の遠足や自然

●主な活動内容

- | | |
|-----|--------------------------|
| 5月 | 若狭町能登野・里地里山「とのの里」一帯。 |
| 6月 | さつま芋植え・森のギヤリ一製作 |
| 7月 | 樹木名調べ・木札づくり |
| 8月 | 昔の遊び道具づくり①
昔の遊び道具づくり② |
| 9月 | さつま芋収穫・里山の秋
みつけた |
| 10月 | 里山の不思議発見 |
| 11月 | 三・一植樹祭＆感謝祭 |



昔の遊び道具づくり体験



田植え体験

ふくいの自然体験と親子交流事業

●実施主体

福井の豊かな自然と美味しい食材を提供して、親子の絆や自然の大切さ、団体行動のルールを体感してもらうことを目的に、平成18年に設立された「福井の自然を体験実行委員会」が実施。

●実施方法
関西、中京地区と福井県内の小中学校を中心にパンフレットを配布。

旅行業者に一部業務委託。関係する府県市教育委員会の後援を得て。

●色々な体験コースを用意

- ・日帰り・一泊二日
- ・現地集合・福井駅、敦賀駅集合
- ・関西、中京発着
- ・自家用車・貸切バス



地引網体験



そば打ち体験



海鮮バーベキュー体験



財団 ふれあい通信

平成24年度 財団の助成を受けたい団体を募集 申請期限4月20日(金)

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて助成をしています。平成24年度において文化活動等の事業を行うため、財団の助成を受けたい団体を募集しています。

対象団体の要件

- 1、福井県内に活動の本拠を置く団体
- 2、構成員（会員）が原則として20名以上の団体
- 3、平成24年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
- 4、営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
- 5、特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

応募の方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を平成24年4月20日(金)まで（申請事業の実施が4・5・6月の場合は3月20日(火)まで）に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは「げんてんふれあい福井財団」にお問合せ下さい。

読者アンケートご回答のまとめ

げんてんふれあい福井 第40号

本誌第40号（平成23年7月発行）のアンケートに総数23通のご回答をいただきました。その結果を下表のとおりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願いいたします。

第40号で良かった記事

- | | |
|--------------------------------|-----|
| ○福井県立こども歴史文化館をたずねて | 8名 |
| ○若狭の歴史と人物
「お初と三姉妹(二)」 | 19名 |
| ○ふるさと福井人物シリーズ
「食育の祖石塚左玄(六)」 | 9名 |
| ○第14回風花隨筆文学賞財団
受賞作品紹介 | 8名 |
| ○ふくいの伝統行事シリーズ
「したんじょう行事」 | 9名 |
| ○敦賀市立博物館誌上ギャラリー/34 | 4名 |
| ○福井の文学碑「小説家 泉鏡花」 | 7名 |
| ○福井の民族文化「北川流域の子供御輿」 | 4名 |
| ○情報ファイル | 5名 |

本誌へのご意見・ご要望

- 「お初と三姉妹」は詳しい説明で、大河ドラマとも重なり興味深く読んだ。
- 子供がいるので食育に興味があり、毎回「食育の祖 石塚左玄」を楽しみしている。左玄の教えは今の世の中に通じるもの。少しでも実践できたらと思う。
- 「風花隨筆文学賞財団受賞作品紹介」は、私と同年代の人の作品も載っていて身近に感じ、気軽に読む事ができた。
- 嶺南の話題に偏りがち。嶺北の話題も紹介して欲しい。
- 高校文化祭に財団が200万円の助成金を出していることは知らなかった。詳しく報じて欲しい。
- 財団から文化団体等への2千万円ほどの助成事業は、今後も続けて欲しい。ジャンルを広め助成金も増やして欲しい。

*なお今回も、福島原子力発電所の事故に関連して、原発に賛成または反対の立場からの意見・要望等も頂きましたが、当財団は地域の文化振興が目的であり、原子力発電の広報・宣伝等はしていません。ご理解をお願いいたします。

財団イベント INFORMATION

文化講演会	講師 古今亭 菊千代氏 (落語家)	平成24年 4/21(土)	敦賀市 東郷公民館	敦賀市連合婦人会と 財団共催
まちなか バンドフェスティバル [ROCK ON'2012]	福井県のバンドによる演奏会	平成24年 6/9(土)~6/10(日)	福井市 響のホール	福井テレビ主催、 財団協賛 (前売1,000円、 全席自由席)
文化講演会	講師 家田 荘子氏 (作家/真言宗僧侶)	平成24年 7/1(日)	福井市 福井県生活学習館	福井県連合婦人会と 財団共催